

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4570101586		
法人名	有限会社 桂花		
事業所名	グループホームきらら	ユニット名	一番館
所在地	宮崎県宮崎市大字赤江830番地1		
自己評価作成日	令和3年7月21日	評価結果市町村受理日	令和3年10月26日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/45/index.php?action_kouhyou_pref_search_list_list=true
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人宮崎県社会福祉協議会
所在地	宮崎市原町2番22号宮崎県総合福祉センター本館3階
訪問調査日	令和3年8月19日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

施設の所在地は自然豊かで静かな場所です。周辺に田園地帯が広がっており、利用者の皆様にとってとても住みやすく心地の良い環境です。また、利用者の急な体調変化など、緊急を要する際には、併設のサザンクリニック(神経内科、心療内科、精神科)が直ぐに対応し、利用者の皆様にとって安心です。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

グループホームは、3ユニットあり、理念はユニット毎に作り、日頃の介護に生かしている。コロナ禍で面会ができないが、電話で家族と会話を行うことで関係継続を図っている。また、外出もできないため家族からの提案を受けて花壇の手入れに取り組み、入所者の気分転換を図っている。受診にあたってはそれぞれの希望するかかりつけ医での受診を優先しており、また専門医での受診が必要な場合必ず職員も同伴し、情報を共有している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	<input type="radio"/> 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	<input type="radio"/> 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/> 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが <input type="radio"/> 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	一番館	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	夜勤者含め職員全員が理念の意味を理解し、理念を共有して地域との関わりを大切にしながら実現に努めている。		理念は、事務所やホールに掲げ共有に努めている。朝礼や毎月職員会議で実践につなげる為、話し合いを行っている。理念は各ユニットごとに作っているが、開設当初から見直しの話し合いが行われていない。	地域密着型サービスの意義や役割を考へて、ユニット毎に職員で話し合いを行い理念の見直しが行われることに期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	近隣中学生の体験学習などの受け入れを継続行っており、地域の祭りなどにも出来る限り参加し交流の場を増やす様になっている。		コロナ禍で保育園との交流、小中学生の体験学習、ボランティア等の受け入れ、地域のお祭りなどが中止になり交流ができなかった。コロナ終息後に交流を行う予定である。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議などを通し、認知症の方の生活など理解を深めてもらえるようにしている。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	参加していただいている自治会長や民生委員、地域包括支援センターの職員、家族から施設の参考になる取り組みや入居者への対応など意見を頂き、施設サービスの向上に活かしている。		コロナ禍で利用者家族、地域包括支援センター、自治会の構成員の参加がほとんどなかった。電話で意見を聞いたが、意見等できなかった。	コロナ終息後の会議開催時には、構成員の方から会議の中で意見等を頂き、その意見がサービス向上に繋がることに期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市町村が行う研修には必ず参加しており、宮崎市のホームページなどからも情報収集も欠かさないようにしている。		市の担当者に電話で、運営上の留意点や疑問などについて相談している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体的拘束等適正化委員会を2ヶ月一回開き、身体拘束の定義などのビデオを観て学べるよう取り組んでいる。全ての職員が勉強し理解を深めている。また、それに当たる行為は一切行っていない。		2か月に1回、身体拘束禁止の具体的な行為や抑制ゼロの取組等のテーマのDVDで勉強会を行なっている。視聴後は、参加職員に感想を記入してもらい理解度を把握している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	定期的なミーティングなどで高齢者虐待防止関連法を学んでおり、職員全員(夜勤者も含む)の意識向上に取り組んでいる。また、虐待防止関係の外部研修にも毎年参加している。			

自己	外部	項目	自己評価	一番館	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護などの研修には参加している。そこで学んだことを職員会議などで報告して職員全員で情報を共有している。			
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	家族や利用者に対して、契約内容や施設を十分理解し、納得してもらえるまで説明している。			
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者や家族からの意見や要望など改善して欲しいことがあった場合には検討し出来る限り施設運営に反映させるようにしている	コロナ禍で面会等できない為、電話で家族から「花壇があるが花が無い。花を植えてもらおうと利用者の気分転換になる。」と意見を頂き、花壇に花を植える取組を行っている。		
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議や毎朝の朝礼の中など職員から意見や提案がでた場合には代表者、管理者で検討し施設運営に反映するようにしている。	管理者は、ミーティング等で職員から意見を聞き、天井の換気扇の周りの壁の汚れを代表者に伝え、新しい壁になり意見が反映されている。		
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員から毎月休み希望を聞いて、出来るだけ希望がかなうように勤務予定を立てている。職員の意見を吸い上げることで働きやすい環境整備をしている。			
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	認知症介護実践者研修や管理者研修、その他の様々な研修に段階的に参加するように計画している。研修で得た知識を報告書を出して職員全員(夜勤者も含む)で共有している。			
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	日本認知症グループホーム協会及びグループホーム連絡協議会に所属しており、同業者と交流する中で情報を得ながら、サービスの質の向上や運営に役立てられるようにしている。			

自己	外部	項目	自己評価	一番館	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人に少しでも安心してもらえるようにゆっくり本人の話聞き、困っていること、不安なことなどを理解するようにしている。速やかに対応するようにしている。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	サービスを導入する段階で、家族等の話をじっくり時間かけて聞き、信頼関係を築くように努めている。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	サービスを導入する段階で本人、家族の話をじっくり聞きながら、現時点で必要な支援から優先するように努めている。			
18		○本人と共に過ごしえあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	料理を一緒にしたり、レクや催し物などを共に楽しんでいる。ホールでは皆で話をしながらテレビを観たり、洗濯物をたたんだりして喜怒哀楽を共有できる関係の構築に努めている。			
19		○本人を共にえあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	施設は家族が出来ない部分をサポートする場所であることを自覚し、可能な限り家族の希望や要望を聞きながら本人を支えていくという意識を職員全員が共有している。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの人には、いつでも施設に来ていただけるように声掛けしている。馴染みの場所に行けるように外出支援をしている。	コロナ禍で馴染みのお店で買い物や墓参り、法事の参加などできなかった。家族、親戚の方からは電話で会話をさせて頂き、関係継続の支援を行っている。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	会話が苦手な方や、入居者の和に入ることが苦手な方がいれば職員が話題を提供して、入居者の間に入って会話のサポートをすることで少しでも関わりが増やせるようにしている。			

自己	外部	項目	自己評価	一番館	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	長期の入院などで施設を退居される方や自宅近くの施設に移動された方などについて、その後の本人の経過を連絡してもらい、関係性を継続し支援に努めている。			
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居者の方に対しては何か希望や要望があれば可能な限り実現できるようにしている。また、意思疎通が困難な入居者についても、本人の動きや目線などを見て求めている事が一つでも理解できるようにしている。	利用者から聞き取りした内容は、申送りノートに記入し職員間で共有を行っている。言葉に出せない利用者は、常日頃から細やかに観察し読み取ったり、家族に聞き意向の把握を行っている。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	生活歴など過去の情報を出来る限り知ることによって本人の様々な行動などを理解できることがある。常にその人を知ることを職員全員で心掛けている。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	今の本人自身の出来る事を理解し支援するように心掛けている。また、職員個々に気付いた事については職員間で情報の共有をしている。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人の希望や意向と家族が望まれている支援ができるよう充分時間をかけて意見を聞きながら介護計画を作成している。	毎月、モニタリングを行っている。担当者会議で担当職員等から意見をもらい作成している。持病の悪化や病院に入院し退院した時など状態に変化があった時に介護計画の見直しを行っている。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個々の介護記録や申し送りノートなどに気付いたことを記入し、その情報を職員全員が共有できるようにしている。また気づきの中で介護計画の見直しが必要なことがあれば速やかに対応するようにしている。			
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	入居者が、より快適な日々が送れるように利用できる支援などあれば活用できるように心掛けている。			

自己	外部	項目	自己評価	一番館	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	本人と一緒に買い物したり馴染みの理容室を利用するなど、利用者の生活がより豊かになるようにしている。また地域の催し物などにも積極的に参加し地域資源を活用している。			
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人や家族が希望される先生がかかりつけ医になっている。家族が受診に連れていけない時には遠方の病院でも施設で対応している。	受診は本人や家族が希望する医師をかかりつけ医とし、介護記録等の情報提供を行い、関係を築いている。専門医を必要とする場合、家族だけでなく職員も必ず同伴している。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	入居者の様子が普段と違うと感じた時には医療連携をしている併設のクリニックの医師や看護師に直ぐに相談し、利用者が適切な受診を受けられるようにしている。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病院のケースワーカーと連絡をとり、本人及び家族が少しでも安心して入院治療を受けられるようにしている。また、市内の病院には定期的に訪問し日頃から関係づくりをしている。			
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	施設に入居される際に必ず終末期の方針などの説明をしている。また、実際に老衰などで看取りの状況になった場合には家族に施設でできる対応などの説明を必ずした上で、家族の承諾を得て支援している。	指針は明文化され、入居時に重度化や終末期の在り方について事業所で行える事や希望を含め話し合いを行っている。既に看取りの実績もあり、主治医・関係機関と職員は連絡を密に取り、情報を共有し体制を築いている。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	施設内での救命基礎講習の実施や消防署が行う救急時の対応などの研修に参加し、応急処置が実践的にできるように努力している。また、様々な事故発生に対応する為、緊急時対応マニュアルを整備している。			
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防隊員にも訓練に来ていただき年間2回以上の消防訓練を実施している。また、運営推進会議などへの参加を促し協力の働きかけをしている。	地域住民の協力を自治会を通しお願いしている。訓練時、参加住民のホーム内外の動線や計画書は説明している。コロナ禍で実施に至っていないが例年通り年2回昼夜を問わず消防団を交え、火災や水害・地震訓練用意と備蓄も備えている。		

自己	外部	項目	自己評価	一番館	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者一人一人の尊厳を大切に、声掛けや会話の言葉の使いにも十分配慮している。プライバシーの確保した対応を行っている。	年6回の介護労働安定センター主催の介護や接遇研修を受講し職員間で共有スキルを高めている。利用者の人格やプライバシーを損ねない言葉使いや対応を心がけている。特に介護者側の気分による心無い対応を無くす取組をしている。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	出来る限り入居者と関わることで、希望や思いが少しでも多く理解できるようにしている。また、入居者の表情や動作などからもその方の思いを気づけるように努力している。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者が食欲がない時には時間をずらして食してもらったり、入浴や散歩なども入居者が望まれた時には可能な限り対応し出来る限り本人のペースに合わせるようにしている。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	その時々の場合に応じて自分で服を選んでもらうように心掛けている。また、自分で選べない方についても毎回同じ服装にならないように職員は気を付けて支援している。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	材料が毎日搬入され調理をしているので、野菜の皮を剥いたり、切ることなど手伝いができる方には手伝ってもらいながら食事の時間が少しでも楽しくなれるようにしている。	利用者の嗜好を大切に、聞き取りをしている。またコロナ禍で職員と一緒に食事等ができない状況が続いているが、利用者の機能に応じた調理参加や消毒の徹底・席をずらしたり環境整備に留意しながら取り組んでいる。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	入居者それぞれ嚥下状態にあった食事形態を取り入れている。メニュー作りは、外部の栄養士に委託しバランスのとれた食事になるようにしている。また、水分量が不足ないように定期的に水分補給をしている。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	入居者の状態に合わせ、普通の歯ブラシの他に、スポンジ歯ブラシ、舌用ブラシなど使用して口腔ケアを行って口腔内の清潔保持をしている。			

自己	外部	項目	自己評価	一番館	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	トイレへの声掛けを行い、排泄のリズムを把握することで少しでもオムツの使用量が少なくなったり、トイレでの排泄ができるように支援している。	個々の排泄パターンを把握してトイレでの排泄や自立に向けた支援を行っている。そうすることでオムツ使用量が少なくなった。また、現在、夜間排泄でのポータブルトイレ支援は改善できており、行っていない。		
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	体を動かす機会を増やすことで自然排便や便秘予防ができるように努めている。どうしても便秘がちな利用者については、主治医又は看護師に相談し下剤などで調整してもらっている。			
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴日の拒否があった入居者に対しては毎日繰り返し声掛けするようにしており、本人が気が向いた時にいつでも入浴できるようにしている。また、時間帯についても午前午後など決めないように入浴している。	入浴日は決まっているが、拒む利用者には、時間をずらしたり、気持ちの変化を待って入浴してもらうなど、いつでも対応可能にしている。仲の良い利用者同士を組み合わせたり、季節が感じられるゆず湯等で楽しめる工夫を行っている。		
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	居室は解放されているので入居者がいつでも休息や睡眠ができるようにしている。日中は、本人に無理がないよう少しでも居室外で過ごされるように声掛けをするようにし、夜間の睡眠がとれるようにしている。			
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の内容を出来る限り理解するようにしており、仮に飲み忘れた時でも薬剤情報で直ぐに確認できるようにしている。また薬包には名前といつ服薬するかを記入し誤薬がないようにしている。			
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家族から、本人の生活歴の聞き取りをしっかり行って、本人が楽しめることを提供できるようにしている。			
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天気が良い時の散歩など適度の外出ができるように支援している。また本人の希望があれば家族に連絡し可能であれば協力をいただいて外泊や外食などに連れて行っていただくこともある。	コロナ禍で従来とは環境が変化している為、天気の良い日は中庭を散歩し気分転換に努めている。家族や馴染みの人とは電話で交流を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	一番館	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	財布や現金を持っていないと不安になられる方については、家族と相談し、了解を得て本人の責任で現金を持っていただいている。			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	入居者が家族や友人に連絡を希望される時には連絡の支援をしている。また、手紙を書かれる方については、切手の購入や投函の支援をしている。			
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共有空間は入居者が過ごしやすいようにテレビの音量などの管理や、不快にならないような温度管理など行っており居心地良く過ごせるように配慮している。	利用者が居心地よく暮らすため共用空間の音量調整、空調換気や消毒を行っている。特にコロナ禍でもあり、テーブルや手すり等は次亜塩素系の消毒液で除菌している。各ユニットのホールや玄関には季節ごとの飾付け(節句、七夕、クリスマス)をしている。		
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	廊下には長椅子を設置するなど気の合った入居者同士で気軽に話ができるようにしている。また、外庭にも木陰や花壇の前にベンチを設置するなど思い思いの時間をすごせるようにしている。			
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	希望があれば出来る限り希望に沿う様に心掛けている。馴染みの物を何でも持ち込んでいただいております、本人が過ごしやすい空間になるように配慮している。	利用者と家族の意向を聞きながら馴染みの家具や仏壇、家族の写真等を持ち込み、極力今までの生活習慣の延長とすることに配慮している。仏壇には毎日お水を供えられるように職員が協力している。		
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室が解らなくなる入居者の居室の前には自分の写真や名前を書いた紙を貼って少しでも自室がわかるように工夫している。			